

SHOW HEY シネマ

★★★

たたら侍

2016年・日本映画
配給/LDH PICTURES・120分

2017 (平成29) 年5月25日鑑賞

ブルガ7

Data

監督：錦織良成

出演：青柳翔／小林直己／AKIR

A／田畑智子／笹野高史／

津川雅彦／石井杏奈／高橋

長英／甲本雅裕／宮崎美子

／品川徹／でんでん／氏家

恵／橋川遼／安部康二郎／

菅田俊／音尾琢真／早乙女

太一／中村嘉律雄／佐野史

郎／豊原功補／山本圭／奈

良岡朋子

◆本作のチラシには、次の言葉が躍っている。

1300年の時を経て今日まで伝わる
唯一無二の鉄「玉鋼(たまがね)」を生み出す技「たたら吹き」。
伝説の地・出雲でその伝統を守ることを宿願づけられた男が、
侍にあこがれて旅に出た。
のちに人はその若者を「たたら侍」と呼んだ。

戦乱乱世に、ひとりの未熟な青年が過ちを繰り返しながら
生きる道を探し続ける物語。
日本伝統の匠の技と、気高い精神を継承することの大切さを、
歴史裡の壮大な映像と共に描き出す。

力とは何か 本当の強さとは何かを 僕は知らなかった。

戦国末期、1000年鎮めない鍛冶を誇るといわれる釣の村があった。
出雲の山奥にあるその村「たたら村」では、
古来より門外不出の高度な鉄作り「たたら吹き」によって
出雲鋼(いづものたたら)と呼ばれる貴重な鋼が作られていた。
天下無双の名刀を作り出す志の願を求め、
刀匠はかりてなく諸国の大名に取り入る商人たたら屋羅起になっていた。

「たたら吹き」を取り仕切る料理(たたら)の弟子伍介は、
一子相伝の技を受け継ぐ宿命だったが、幼い頃、師匠を引う山賊に村が襲われて以来、
強くなって村を守りたいと思うようになっていた。

ある大名のための鍛冶を求めて村に訪れていた商人の惣次郎から
農民でも侍になれる侍格があったことを知る惣次郎は、
「村を出て侍になりたい」と村の奴に頼んで旅に出る。
しかし、そこには厳しい現実だけが待っていた。

ブロックバスター映画として世界に通用する作品。 現代で新しいビジョンを持った作品。
是非、オスカーに出すべきだ。 古典的な筆遣いの映画は侍を世に伝えているものと違い、侍の魂(心)にある真実を追求している。

モントリオール映画祭観客賞受賞作品
——セルジュ・ロジーク—— ビュール・アナンリ・ドロー

5.20 全国公開

◆また、平成29年12月30日付読売新聞で、映画評論家・佐藤忠男氏は『「たたら侍」の風格」と題して、次のように書いている。

「たたら侍」の風格

映画評論家 佐藤忠男

「たたら侍」は日本の時代劇映画の巨大な流れの中でも画期的な作品と言えるだろう。時代劇の大部分は侍かやくざを主人公にして作られてきていて、日本人の人口の大多数を占めた農民は、主役としては滅多に描かれたことがない。「たたら侍」も題名どおり侍が主人公のようであるが、正確に言えば侍への道へ進むかどうかまだ迷っている戦国時代の百姓の物語である。主人公たちは出雲の山村で刀づくりに入り込んでいる人々で、当時の身分制では侍ではない。しかし戦乱の時代に村を侍たちの武力から守ろうとすれば農民たち自身が武力をもって戦うしかない。有名な「七人の侍」では農民が侍を雇って戦いの仕方の訓練を受

けたりするが、実際には戦国時代には、村自体が相当な武力を蓄えてもいたらしい。それが戦国時代が終わると武士と農民が分離して、百姓は戦わないものとされてしまう。

「たたら侍」では、武士の武力のものである刀づくりをしてきた百姓たちが、武力とはなにかと考え、武力のあるべきモラルとしての武士道の追求に至る。しかし、侍になることが本當に村を守ることになるのか。ただ支配者になるだけではないのか。時代劇映画の長い歴史で殆んど問われることがなかったこの問いから、こそこの映画は出発する。そこがこの映画の画期的なところである。

実際には戦国時代でも江戸時代でも日本の百姓は相当な自治力を保っていた。日本の民主主義は村の寄り合いを土台とするこの百姓の自治力の再評価から考えなければならぬと柳田国男などは言っている。しかし残念ながら、かつてのそういう考える百姓には若干の農民一揆もの以外には映画で出会ったことがない。しかも映画の一揆ものでは百姓はいつも追いつめられて切羽詰まっただけからやっとな動くものということになっている。百姓は自由にのびのびと自分の頭で考えるはずがないとも言うように。

そんないつ出来たのか分からない先入観からこの映画は自由である。これは露城良成監督をはじめとするスタッフの面々が出雲の民で、神話の時代以来の独立自尊の心意気を持って出雲を描こうとしているからか。侍とはなにか。人はどうして侍になるか。なつてどうするのか。これまで膨大に作られてきた時代劇映画で滅多に問われたことのない問いがこの映画にはある。そこから出発した風格が頼もしい。

◆本作の主人公・伍介（青柳翔）は、生まれた時から出鐵鋼（いずものはがね）と呼ばれる玉鋼（たまはがね）をつくることを宿命づけられた男。戦乱の世において、たたら村の上質な鉄を生む技術は諸大名から狙われていた。そんな中、伍介は村を守るために武芸を磨いていたが、ついに侍になるため、村を出ることを決意したが・・・。

なお、本作に登場する人物たちの相関図は、次のとおりだ。



◆本作について私は以上3つの事前情報を得ていたため、「こりゃ必見！」と思って映画館へ行ったが、何と観客は10名足らず。こりゃ一体ナニ？

本作は、冒頭の大乱戦(?)の後、伍介が「力とは何か 本当の強さとは何かを僕は知らなかった。」と独白するシーンから始まるが、その後の展開を見ていると、この男は広く世間を見渡し、侍になるため商人の惣兵衛(笹野高史)と与平(津川雅彦)を頼って織田軍の一隊に入隊するものの、その隊が全滅した後はまた村に舞い戻るだけ。せつかく「出鐵鋼」で作ってもらった立派な刀も、何の役にも立たない体たらくだ。

◆さらに、本作には人物相関図のとおり多種多様なキャラが登場するが、それらのストーリーの結びつきが陳腐で、黒澤明監督の名作『七人の侍』(54年)の精密さとは比べようもない。とりわけ、尼子再興軍の長である尼子真之介(AKIRA)と密偵・お京(田畑智子)の不自然さ、与平が雇う傭兵・佐吉(菅田俊)の異様さは、織田信長が明智光秀の裏切りによって死亡したという時代背景と全く結びついていないから、違和感でいっぱいだ。

◆さらに、いくらたたら村が「たたら吹き」の技術に優れていても、短期間に大量の火筒(鉄砲)を製造したり、これを使いこなして村の自衛軍を組織したりするのが無理なことは明らかだ。そもそも、大雨が降っている中、火縄銃を発砲することができるの？

◆そんな、こんなを観ていると、いい加減ウンザリ。さらに、ラストで本作が見せる“教訓”はあまりにも理念的で、わかったようなわからないような……。『七人の侍』のラストは農民の強さを力強くアピールしたが、本作に見る、たたら村のあり方と伍介の生きざまは果たしてこれでよかったの……？

2017（平成29）年5月29日記